

2人の名図書館長 — 椋鳩十と島尾敏雄 —

三 島 盛 武

はじめに

今日は「2人の名図書館」と題して、椋鳩十と島尾敏雄についてお話しをさせていただきます。まず、最初にこの講演における2人の呼び方についてお断わりさせていただきたいのですが、椋鳩十さんについては、もちろん、鹿児島女子短期大学の教員をされていたので、「先生」で間違いはないのですが、私から椋先生とお呼びするのは何か違うなという気がしております。一方、島尾敏雄さんは私たちと同じ短大での同僚という意味で、「島尾先生」という呼び方にさほど距離感はありません。ですから、ここでは、椋鳩十さんは「椋さん」、島尾敏雄さんは「島尾先生」というような言い方に統一して話したいと思いますので、一応そのところをご納得いただきたいと思います。

鹿児島は文学不毛の地か？

実は、意外ともう今は知られていませんが、鹿児島県というのは文学不毛の地と言われていました。特にこれは評論家の奥野健男が盛んにそれを言っていますが、薩摩の人の気質というのは、政治や絵画にかなりたくさん出ているため、そちらの方にもっていかれたのではないか、文学的な内容にはどうも弱いみたいだというふうになっています。しかし、文学の世界で郷土の作家というのは鹿児島にいて、鹿児島で書く人達だけを指すのではなくて、例えば、椋さんや島尾先生のように鹿児島出身ではない入り込みの作家もいれば、一方、鹿児島の人なのに鹿児島をでて小説を地方で発表しているという人もいます。そういう面では、鹿児島出身、あるいは、鹿児島で書いているという人達だけを郷土の作家と

いうのはどうもおかしいのではないのでしょうか。そう考えると椋さんと高尾先生はもう長い間鹿児島で生活をされているので、もうはつきりと鹿児島の人だといっても問題ないのではないかという気がします。そして何よりこの2人は、鹿児島の名を全国に広めた功績者であり、椋さんが鹿児島県立図書館長、そして高尾先生が奄美の分館長を同時期に務めていました。本館長と分館長、しかも同時期に赴任するという、まさしく空前絶後の陣容を誇ったというのは、たぶん全国にも例がないと思われれます。さらに2人は図書館長の役割に加え、作家あるいは小説家としても力を発揮されています。たとえば椋さんの場合には、戦後の児童文学の最高傑作といってもいい作品『マヤの一生』を昭和45年に書いています。一方、高尾先生は、昭和35年から連載小説『死の棘』という小説をかき始め、最終の『入院まで』という作品を17年かけて書き上げています。もちろん、2人とも、図書館の仕事をしながら活動されています。高尾先生の『死の棘』というのは戦後の文学の最高傑作といっても過言ではありません。いわゆるこのような賞で判断するのはいいかどうかは別問題となりますが、椋さんは第1回赤い鳥児童文学賞を受賞され、高尾先生は谷崎潤一郎賞などのいわゆる日本文学大賞や戦後文学賞など受賞されています。実は、前に一度、私は高尾先生と一緒に先生が受賞された賞の数をカウントしたことがあります。南日本新聞社が出している南日本文学賞や、琉球文学賞など全部合わせると30は超えました。このような事実から考えますと、鹿児島は実は文化的にもレベルが高い方だと言ってもよいのではないのでしょうか。

2人の「出会い」

2人に共通しているのは、それぞれにすごい「出会い」があったということです。そのことは、昭和59年の1月3日のKTSで放送された「日曜の茶の間」という番組で語られています。まず、高尾先生の話から入りますと、ここでは先生にとっての出会いは「奄美大島」と言っています。高尾先生は、昭和19年に加計呂麻島に第18震洋隊という特攻艇で183名の隊員を率いて呑之浦で基地をつくりますが、これは特攻艇なので、当然でていけば帰ってはこられません。昭和19年の日本というのはもうほとんど特攻艇などは戦力にならないような状況で、言ってみ

れば特攻艇は道具のような扱いでした。そして、実はここで後に妻となる大平ミホに出会います。島尾先生の基地があったのは呑之浦という集落で、そこからひと山越した所に押角という集落があり、大平ミホはこの集落の人でした。この呑之浦と押角の間で交流が始まります。その大平ミホの義父が大平文一郎という人で、やがて島尾先生は『私の中の日本人』という作品の中で、私の中の日本人というのは大平文一郎だということを書いています。島尾先生は、特攻艇なのでもう死ぬことはわかっていました。死ぬことがわかっている人を好きになったというところで悲劇が始まります。島尾先生の代表作である『死の棘』というのがなぜあれだけの、いってみれば壮絶な家庭内の戦いが行われたかという理由がこの出会いにあるのです。死んでいくことが義務づけられている人を好きになった人ということが一番の問題だと思われるます。島尾先生は、昭和20年8月13日に出撃命令がでたため、特攻艇として出て行くつもりでいました。しかし、出ていけば帰ってはこられません、死しかありません。あらゆるものを捨てて自分は出て行くという決意を固めるのですが、実は最後の発進命令ができません。発進命令がでるまではその状態ですと待機していなければなりません。特攻艇で死ぬことは怖くないといいながら、その覚悟をした人間が1日か2日そのままの状態でおかれるということがいかに大変なことでしょうか。そして、昭和20年8月15日、とうとう発進命令がでないまま終戦の日を迎えます。そうすると、死を覚悟していた人達が、今度は生きることを覚悟しなければならなくなります。そのあたりの内容というのは、島尾先生の戦記ものにはたくさんでてきます。昭和35年に書いた作品『出発は遂に訪れず』というのもそのひとつです。

そして、島尾先生というのはある面では死と隣り合わせている部分があると思います。実は、関東大震災のときに、島尾先生の自宅は横浜にありました。しかし、ご自身の原因不明の病気のために両親の出身である福島県の相馬にたまたま行っておられました。そのときに震災がおき横浜の自宅はつぶれてしまいます。その頃、貿易商をやっていた父親は横浜ではもう商売ができないということで、神戸に移ります。これが神戸にいった理由です。やがて長崎の高商、今でいえば長崎大学経済学部に入學します。そのひとつの選択として、島尾先生はどういうわけか鹿

児島高商を受けたいというようなことも言っていたらみたいですが、結局長崎に行くことになりました。このように、まず関東大震災のときに横浜にいたら危なかったのではないかなという事は本人も言っておられました。それから先述した昭和20年8月13日の話になりますが、これも紙一重の出来事でした。もしあの終戦の発表がもう少し遅れていたら、先生は特攻艇として出ていった可能性がありました。そして、実はこの特攻艇でどの部隊を率いるかというときにも鳥尾先生には大きな変換がありました。当時、鳥尾先生はどうせ死ぬのであればできれば自分の国の言葉を聞いて死にたいというのが偽らざる心理でした。すると、他の隊長で北海道出身の人がおり、自分は北国の出身だから、北国の隊員が多い部隊を率いたいと彼が言うので、鳥尾先生の部隊と隊を変えました。そして、本来、鳥尾先生が率いるはずだったその部隊はそのままフィリピンのコレヒドールへ送られます。そして、その送られた震洋の部隊は全滅してしまいました。だからもしそこで鳥尾先生がそのまま自分も東北の人間だから東北弁を聞いて死にたいということで部隊をかえていなかったら、コレヒドールにいて全滅するという可能性がありました。このことに関して、鳥尾先生は、そう外国にいきたいというほうではなかったのですが、とにかく死ぬ前に1度はコレヒドールに行きたいと言っていました。鹿児島に帰ってきたときに、パスポートも取り、旅行の手配も出版社がしていたのですが、コレヒドールに行くという寸前で体調不良のために、これも中止になったということがありました。先述した加計呂麻で結果的には呑之浦で終戦をむかえます。終戦をむかえてそれから兵を解除し佐世保へいき、小説を書きます。それは昭和61年11月の『国破れて』という小説です。「復員まで」というサブタイトルのつけられたこの作品を見ますと、昭和61年に昭和20年の時代の話を書いていたということは、鳥尾先生にとって、20年30年というのは、長い年月が過ぎたという感覚ではなく、自分の生き方の中では非常に大事なことだということがわかると思います。だから、鳥尾先生の作品というのは、発酵するまで待つ、書かねばならないときに書き出していらっしゃいます。そして、『死の棘』という作品についても、実は昭和35年に書き始め、そして脱稿したのが昭和52年、鹿児島の加世田のほうにあるみどり温泉という旅館で書き上げました。ちょうどその頃、鳥尾先生

2人の名図書館長

は鹿児島純心女子短期大学に勤務されていました。そういうことからいくと島尾先生の両親の出身は福島、そして横浜、神戸、長崎、福岡など点々としませんが、ひとつの生き方の道が決まってくるのは、やはり呑之浦であると考えられます。特攻体験というのが島尾先生の人格形成には大きな影響を与えているということになります。そして、その後、昭和30年10月に鹿児島に再度帰ってくるのですが、奄美、当時の名瀬市に住まれます。当時、昭和30年というのはまだそれほど全国の通信網が発達しているところでもない、電話が通じるでもないという時代に、奄美に移住してきました。これは妻ミホの病氣療養のためでした。そして、奄美大島でどんなことをやっていたかというのが、島尾先生の『島にて』という作品にでています。ここには、島尾先生の性格上、非常に丁寧に書いてあり、「奄美琉米文化会館と名称を変えつつ存在してきた施設が、奄美本土復帰（昭和二十八年十二月二十五日）により鹿児島県に移され、「奄美日米文化会館」と改称して」というのがでています。ここで島尾先生は鹿児島県の職員となり、会館長を務めることとなりますが、その施設はやがて、「日米文化センター」に改称されます。そして、「その施設と職員を利用して鹿児島県がそこに予算の裏付けをあたえたとき、この施設は県立の公共図書館として奄美の島々にゆきわたってその運営と活動を開始することになった。」と記述されています。ここで奄美分館が正式にでき、最初の分館長を島尾先生が務めることとなります。

棕さんにとっての出会い、2人の優秀で情熱的な先生で、この2人との出会いが自分の人生を変え、それが生きていくひとつの価値になったと言っています。その先生というのは、まず1人は、やがて弁護士になる正木ひろしという先生、もう1人が早稲田を卒業してそのまま長野県の中学校にやってきた佐々木八郎という先生です。この2人の先生が、授業が終わった放課後、子供達を集めて、1時間くらい授業をされたそうです。その授業というのがどんな授業かという、集まって話を聞くというものなのですが、まるで目の前に物事が見えるような話をされました。それを聞いて若い彼らは非常に心を躍らせます。その話の中で、当時読まれた作品の1つに徳富蘆花の『自然と人生』という作品があります。これはトルストイに影響を受けた作品ですが、これを聞いて、ほんとうに自然というのは美しいものだなと言って、ふと周りを見ると

いながらの自分の生活しているところの風景が沸々と頭の中に沸きあがってきます。佐々木八郎という先生は中世文学の大家であり、やがて早稲田大学で平家物語を講義される人ですが、この先生がまたいかにも目の前にその情景が浮かぶような話をされたそうです。椋さんはこの2人に自分は触発されたといっています。考えてみると、後に示しますが、昭和35年に椋さんは親子20分間読書というのを始めます。その時の趣意書には、とにかく音読が必要だと書いてあります。今、本を読むときは黙読が多いですが、音読をすることによってその世界に入っていけるのです。ですから、そういう面から考えますと、おそらく椋さんのこの親子20分間読書というのは中学校時代にその2人の先生によって啓発をうけた、それが基になっているのがあるのではないかと思います。ただ、そのあたりの相関関係についてはまだ正確には不明ですが、それは椋さんの中に非常に大きな要素として残ったのではないかという気がします。

椋さんは、昭和5年に鹿児島にやってきます。山の人だった椋さんが鹿児島にきた理由のひとつには南の島に興味があったということと、ジャック・ロンドンという作家に非常に思いがあったというのがあります。そして、最初に勤めたのが中種子の小学校の代用教員です。山の中から海に近いところに行くこととなります。長い間、長野県で生活していた椋さんにとって、種子島の暑い気候は大変なものでした。そして、あまり俸給ももらっておらず、物を買おうと「○○を買った」というメモ用紙を店に渡すと、店がそれを持ち小学校に直接請求にっていました。ところがその小学校がなかなか金を払わないというので、あんまりいい思いはなかったといっています。そして、ある日、あまりに暑かったため、次は体育だからと上半身裸（あるところでは「猿股を履いていた」といい、あるところでは、「ふんどし姿になった」といっていますが）になりました。すると、ちょうどそのとき、校長と村長が新しくやってきた教員がどのような授業をやっているのかを視察にやってきました。すると、校長と村長がその上半身裸の椋さんを見て、何ごとだと激怒したそうです。そして翌日、校長室に行くと「本日より登校に及ばず」という紙が一枚渡されました。すなわち、クビです。しかし、これでは困ると学校にいき、とにかく金をくれといたっけれども、村の金がなくて

2人の名図書館長

もらえませんでした。そして、そのまま船にのって鹿児島に帰ってくるのですが、なんとそこに自分の奥さんが待っているのです。今から島へ行こうと思っていたのにそれ以前に旦那のほうがかえってきたのです。既にその時には長男の喬彦さんがいます。鹿児島に帰ってきたが仕事がないし、子供は産まれたし、このままでは困るというので職を探していると、棕さんの姉が探してくれ、加治木高女、現在の加治木高等学校に勤めることになります。その勤務期間は、昭和5年から昭和22年までです。昭和22年の4月には校長事務扱兼教頭という仕事が舞い込みますが、昭和22年の11月に、当時の鹿児島県知事である重成格氏が、当時の南日本新聞社の社長の畠中氏（やがてMBCの初代の会長となる）を通じて、久保田彦穂（棕さんの本名）さんを図書館長にしたいということをし、畠中氏に頼んで打診します。そうすると、棕さんは加治木高女をやめ、鹿児島県立図書館の館長になるのです。それから、およそ20年間鹿児島県立図書館長を務めることになります。

20分間親子読書運動

そして、棕さんはもっと子供たちに本を読ませなければならないことに気がきます。昭和35年前後というのは日本が栄えていく時代です。そうすると、男女問わず生産業に携わることになります。特に鹿児島の場合、農業が中心であるため農業に母親たちが時間をとられてしまい、これでは母親が子供達と接する機会がなくなるのではないかと考えた棕さんは、昭和34年から1年をかけて県民運動を起こそうと企画をたてます。それが昭和35年に始まった親子20分間読書という制度です。これはさつま町の流水小というところをモデルに始まりますが、最初は5万人くらいの参加をみていましたが、やがてこれは13万人くらいの参加をみるようになります。「親と子が共に伸びる20分間読書運動の主旨」という文書を廻して県下一斉に行いました。その主旨というのは、「過去1年間の研究実績をもって広く県下に「親子20分間読書運動」を展開し、これによって県内隈なく読書網の間隙をなくし、広く読書に対する関心と意欲を高め、親も子も読書の習慣を体得して、根強く生活の中に生かされるよう、あらゆる関係機関、団体等の協力によって」という内容で始まっています。親子読書の在り方というのは、「毎日、子供が20分間

ずつ本を読むのを、親が聞くやり方で、3日間で1時間、1ヶ月では10時間、1年間には15,6冊から24冊以上の本を読むこと」です。読書をするとうような効果がある、親と子の心の結びつきに通じ、親の側にも子供にもこのような影響を及ぼすというような主旨を書かなければ、この読書運動というのは、うまくいきませんでした。これは次第に全国に広がり、20分間母親が仕事をせず子供と向き合うというのは、子供に本を読ませることよりも、母親を子供の手に戻そうという、意図があったと思います。椋さんは常にそのことは言っています。ちなみに、当時奄美分館長であった島尾先生もこの活動に協力しています。昭和41年の作品『島にて』によると「このごろは、本館（鹿児島市にある県立図書館）が考えだしその運動を進めている「母と子の20分間読書運動」という、おそらく公共図書館の読書運動としては画期的な仕事を分館の私たちもその区域での実施にのりだした」という明記があります。これは全国的に展開され、鹿児島方式とも呼ばれますが、これが椋さんの図書館長としては最大の功績ではないかと私は思います。そして、県立図書館を41年に退職したあと、42年から鹿児島女子短期大学の図書館長を務めます。椋さんの書いた「私の文学」という文章によれば、そこでの図書館長時代の12年間に約100冊小説を書いたといっています。

司書としての島尾

一方で、島尾先生の分館長としての仕事については、『本の置き場所』という作品の中に入っている『作家のエッセイ』にある「司書との訣別」に書かれています。余談になりますがこの小学館からでている『作家のエッセイ』というのは、日本近代文学館の資金がいくらあっても足りないため、作家達に原稿やエッセイを書いてもらい、その印税のいくらかを出してもらうということで始まったものです。話は戻りますが、ここには島尾先生が司書としてどんな仕事をしていたかというのが書かれています。島尾先生がやっていた仕事というのは「購入図書を選択と郷土研究会の運営の世話や会報編集」です。そして、会報あるいは編集などをやっていたということについては、『日の移ろい』という日記形式で書かれた作品にいろいろな状況がでてきます。たとえば、今日は郷土史の編集をやったとか、今日は印刷屋にいったなどという話がでてきま

2人の名図書館長

す。ですから、「結局最後まで分担した仕事は、郷土研究会と途中で設置した読書会の運営そして図書選択のうち館内備えつけの一般図書の方についてのそれであった」とあり、『作家のエッセイ』の後のほうに、これはちょっと我々は知ることでできなかった内容が書いてあるのですが、「私の使った資料は」という記述があります。鳥尾先生は何を使って本を選んだのでしょうか。今であればインターネットで調べたることができるのですが、当時、鳥尾先生は、「新聞紙上の出版広告、書評、そして週刊書評三紙、出版社直送のパンフレット、利用者による投書、そして利用統計」などを使っていました。もちろん、ここまで、当時としては当然のことですが、ただ少し他の館長と違うのは、その次にあります「著名な出版社による出版物だけでなく、ひとりふたりで経営しているような小さな出版社、もしくは地方の出版社発行のものにも目を配った」というところです。ここが鳥尾先生らしいところなのですが、ご存じのとおり、鳥尾先生は、小川国夫の自費出版作品の『アポロンの島』を、目ざとく見つけてすぐ購入し、そして、それを1冊の本として好評しました。実は、小川国夫という作家を世に出したのは鳥尾先生ではないかというような言われ方をするのはそういうところにあるのです。大手の出版社のものだけではなくて、小さな出版社であったとしても、いい作品があれば見ていました。そういう司書としての役割も充分果たしていらっしゃいました。そして、図書館長というのは行政職であり、司書の資格がないのに図書館長という人が一般的には多いのですが、鳥尾先生は、自分はやっぱり職種を全うするためには司書の資格をとらなければならないといい、2か月か3か月かけて熊本商科大学に通います。そして、そこで司書の資格を取得するのです。同時に、今度は奄美分館の館員達にも、交代で司書をとりにかせました。そして、鳥尾先生が亡くなって1週間もたたないうちに書かれた「鳥尾先生のこと」という7回連載の南日本新聞の記事に、椋さんが書いた記事があります。鳥尾先生といえばこの司書の資格をとりにいくというエピソードを思い出すと書かれていて、椋さんが鳥尾先生についてこのような形で大きく書いているのは、この記事しか今のところ見当たりません。

実は、鳥尾先生というのは、真ん中をあまり好む人ではありません。常に端が好きな人です。よって鳥尾先生の文学を考える時、いくつかの

分類がありますが、島尾先生の物の見方の中で、われわれが今参考にしなければならないものに、南東論、ヤポネシア論というのがあります。ヤポネシア論というのは、日本の文化を大和中心で見ただけではなく、南からも見ていいのではないかという考え方です。考えてみると、島尾先生の両親の出身は福島の当時の相馬郡です。その島尾先生の自宅から500メートルないところに埴谷雄高という作家がおり、すぐ近くには荒正人という文芸評論家もいました。そういう面では東北からもそのような立派な人がたくさんでいると言えます。しかし、東北というのは蝦夷に代表されるように大和の歴史からはほとんど消されています。そして、島尾先生が人生の69年の中で一番長く過ごしたのは鹿児島であり、その中でも一番長かったのは、昭和30年から昭和50年までの奄美の生活です。昭和50年に奄美をひきあげて鹿児島の指宿の二月田というところで約2年近くいて、その後、茅ヶ崎に移り住むも、昭和58年には再び鹿児島に帰ってきて、昭和61年までの3年、亡くなるまで過ごしており、島尾先生の人生のかなりの部分というのは、鹿児島と関係があるのです。ということからみると、島尾先生がいつも言っていたのは、我々は何か誤解していないだろうかということです。明治維新になりみんなが東を見始めたときに、だんだんと鹿児島は、違う方向にいつてしまったのではないかというのが島尾先生の考え方の基礎となります。奄美というのは大和と違います。大和にいる人達は大和のことをずっと考えているため、大和をよい方に見ますが、逆に大和を正確に見るためには、例えば東北から見るとか、あるいは南島から見るとかという手もあります。こうやってみると世の中の見方は変わるというのが島尾先生のいわゆる南島論です。そのため、図書館長として島尾先生は、奄美郷土研究会をやったり、奄美短歌会をやったり、奄美読書会をやってみたりして、みなさんの力、あるいは、物の見方というものを変えていこうとしました。昭和30年から35年に奄美が大きく変わります。テレビなどのような文明の利器が入ってくることによって、奄美の文化そのものが危機的な状況に陥るのではないかというような危惧の念をもう既にもっていらっしやいました。ということを見ると、島尾先生という作家は、決して作家だけではなくて、物事を正確に見極めることができる人物でもあったのだと思います。

西郷隆盛について—南島との出会い—

そして、今年大河ドラマでも取り上げられています。西郷隆盛についても、島尾先生は言及しています。島尾先生が言うには、西郷隆盛が奄美に流された時は30代です。30代の男性が奄美に流されて、奄美の人達から何の影響も受けなかったというのはおかしいのではないかという考え方をされています。どうしても西郷が奄美に流された話になると、西郷によって奄美の人達が啓発を受けたという話が多くでてくるのですが、逆に、西郷が島の人達からの影響も当然うけたのではないだろうか、西郷がやってきて新しい物の見方ができたということではなくて、逆に奄美が西郷に影響を与えたのではないだろうか、ひょっとすると西郷の優しさというのは、奄美で学んだのではないかというのが島尾先生の考えであり、これは非常に意味があることだと思います。『島尾敏雄対談集ヤポネシア考』という中に「西郷隆盛のソフトな雰囲気は奄美の影響」という島尾先生の見解があります。その原稿の終わりのほうに「太平洋側から日本をふりかえる」という文献によれば、「われわれは、これまで大陸の方ばかりを眺めてきすぎたような気がするんです」とでてきます。つまり、どういうことかといいますと、日本の文化というのは常に大陸文化、朝鮮半島をつかって中国を通りそれから韓国を通り、大陸文化で日本というのは、今まで支配してきたようなとらえ方があるが、実はそうではなく、もう少し日本というのを南から見る視点があってもいいのではないかという考え方です。そのひとつの例として、島尾先生がよく言っていたのが、ザビエルはマラッカをでて、鹿児島に直接きたはずはないのではないかという見解です。これは当然のことであり、途中は、沖縄に寄ったはずですし、それから種子・屋久には寄ったと思います。そして、ペリーが浦賀にくるときも、あたかもあれがもう近代化の始まりであるといっているのですが、あれは、日本の幕府が物を考えている間、彼らはアメリカに帰ったのではなく、いったん南の方でじっとしていたはずで。そういうことをもう少し検討してもいいのではないかという考え方です。これらの面からいくと、島尾先生というのは小説家だけでなく、いわゆる文明批評家的な面も十分もっていたのです。それは、おそらく、島尾先生が、大和の人でありながら、東北の血ももっていました。それから南国に長く住んでいたなどを考えます

と、単発ではなく複眼的なものの見方をもっていたのではないのでしょうか。

林芙美子について

実は、私は、棕さんに三度しかあったことがありません。その中で、棕さんにどうしても聞きたいことがありました。それは、林芙美子についてです。林芙美子の『屋久島紀行』の中に「宿は九州の県知事が集まるといふので、一日追はれて」という明記がありますが、「追はれて」という記述は、いかにも鹿児島県が悪いようにかかれてあるので、このことについてどうしても気になったため、棕さんに尋ねたことがあります。なぜなら、これは昭和25年の4月であり、それは、棕さんがまだ新米図書館長のころです。一方、林芙美子は、編集者をつれて長崎からやってきます。まるで石をもて追わるるごとく郷里をでていった彼女は、『放浪記』の大ベストセラーもあり、人気作家として、鹿児島に帰ってきて、当時鹿児島で最も高級な宿泊場所であった岩崎谷荘に泊まるも、翌日からの九州知事会の開催のため、宿泊ができませんでした。林芙美子は、追いだされたといっているが、その前に既に予約が入っていたのであるが、そこを強引に林芙美子が宿泊したのであるから、追い出されるのは当然のことです。しかし、追い出されてというふうに書いてあると何となく鹿児島の人とは文学関係には、配慮がないようなふうに見えるため、この件について棕さんにお会いして話を聞いたことがあり、それは間違いのないということでした。

鹿児島島の抱擁力

林芙美子は大正3年に鹿児島にやってきて、母親の妹である叔母のところに預けられます。それから25年後、鹿児島にやってきたのが向田邦子です。この向田邦子の家は3時のおやつは、ちゃんとお茶がでて、きれいなおやつがでてきて、林芙美子のように黒砂糖などはでてきません。これは、向田邦子と林芙美子の置かれた立場が違うということになります。それから、もうひとつ、干刈あがたという沖永良部出身の作家がいます。この「干刈あがた」という名前は見ただけでおわりのように、「あがた」というのは、地方という意味で、「干刈」というのは、

2人の名図書館長

光です。光は地方からという意味で、離婚した親子、それから社会から常に追いだされてしまうような人達のことを書いたのが干刈あがたであり、東京へ脱出した作家の一人です。彼女の年譜の中に「1975年、昭和50年3月島尾先生の呼び掛けで作られた奄美郷土研究会の会員になった」というのがでできます。そして、彼女が言っている『樹木の家族』の最後には「自分が眠りに引き込まれそうになると東支那海に沈む夕日を思い出す。そんな時は「島にいこうかな」ではなくて「島に帰ろうかな」と思う。」という文章がでできます。島尾先生のやった奄美郷土研究会というのは、出ていった人達のやはり心の拠り所になっているというのがあるのだと思います。

おわりに

今年は椋さんの没後30年、島尾先生の生誕100年という年にあたり、非常にわが鹿児島と関係のある2人のひとつの大きな区切りとなる年となりました。そして、これは繰り返しになりますけれども、椋さんが昭和22年から昭和41年まで鹿児島県立図書館長を約20年間、島尾先生が昭和30年から昭和50年まで奄美の分館長を20年間務めたこと、そして鹿児島県がこの体制を変えずに2人がやっている仕事を認めて続けさせたところなどから考えますと、鹿児島というのはとても文化的にレベルが高いところだと言ってもいいのではないかと私は考えて、今日は「2人の名図書館長」と題してお話をさせていただきました。

(鹿児島純心女子短期大学教授・図書館長)